鳥見の記　散策を楽しもう

第1回 いつでも、どこでも見られる鳥

カラス・スズメ・ヒヨドリ・ツバメ・ハト

2018.2

鳥見の記 を書くにあたって

会社と家を往復していたサラリーマンの「月給鳥」が退職し、毎日が日曜日になり始終ぶらぶらする「ブラリー・マン」になりました。そして気づいたことは、みずき野がいくつかの緑豊かな公園に恵まれ、自然が色濃く残る雑木林や田畑に囲まれた環境にあり、里山を思わせる街であること、そしてみずき野や周辺を散策すれば、四季折々にそれぞれ違った場所でさまざまな野鳥に出会えることでした。

サクラの咲き始めた頃のある日、さくらの杜公園の橋付近で、林の中で「ジュルリ・ジュルリ」と鳴き飛び回る小鳥の群れを見ました。その日から「ブラリー・マン」は、その愛らしい目をして飛び回っていた鳥（エナガ）に再会したいと、みずき野と周辺の林でその鳥を探し廻る鳥見の「バーダー」になりました。

「鳥見の記」は、木々の葉が落ちた林で容易に鳥を見られる今の季節の散歩に、暖かくなるこれからの春に、野原のツクシ探しやタンポポの花を求めて散策する時に参考にしていただけるよう、野鳥の写真にその時期・場所の情報を加えた記です。「―散策を楽しもう―」に少しでもお役に立てればと思います。

3丁目のバーダー・サトー

佐藤 健三

鳥見のワンポイント

- ✧ *鳥の鳴き声に「耳」を澄ましましょう！*
- ✧ *「足」を止めましょう！*
- ✧ *「目」を凝らしましょう！*

カラス

カラスは「都会っ子」それとも「田舎もん」？

朝、日の出とともに「カァ～」と鳴きながら飛びだし、日の入りとともにどこへともなく飛び去るカラス。都会・市街地や河原に生息し、くちばしが太く湾曲してゴリラのようなおでこ顔をして澄んだ声で「カァ～」と鳴くのは「ハシブトカラス」（下記写真左）です。郊外や田舎の人家周辺の河原・森林に生息し、くちばしが細く小ぶりな体形から濁ったダミ声で「ガァー」と鳴くのは「ハシボソカラス」（同右）です。

ハシブトカラス〈大きさ57cm　留鳥①〉

ハシボソカラス〈大きさ50cm　留鳥〉

第二調整池では、両方のカラスを見ることができるどちらかというと「ハシボソカラス」が多いかな？

人に身近なカラスは、その昔「太陽の使者－太陽の黒点から飛び出した鳥－」と呼ばれていたそうです。それゆえ、カラスにまつわる童謡・童話や伝説・神話は数多くあります。例えば日本サッカー協会のシンボルマークである「八咫烏」のいわれ、北米先住民のワタリガラスとトーテムポールの話、ギリシャ神話の「ノアの方舟から放たれたカラスとハト」の話、等々・・・一度インターネットで検索してみるのも一興かもしれません。

鳥識①：留鳥
一年中同じ場所で生活する、あるいはその地域で見られる鳥。

「鳥識」は鳥の知識の意味で使います。

ハシブトカラスは、都会ではゴミをあさり、散乱させる嫌われ者でも、カラス類の多くは自然界のスカベンジャー（腐肉食動物）といわれ、生態系で動物遺体の分解に寄与し環境保全に役立っている。

また、鳥類の中でもかなり高い知能の持ち主といわれ、クルミを路上に落として割ったり、路上に置いて車に轢いてもらって殻を割ったりもする。

アオサギ（左）と仲良く
第 2 調整池原っぱの水たまり　3月初旬

ハシボソカラスの巣
戸頭付近の大木　4月中旬

ハシボソカラス（右）とサシバのバトル
市之代（取手市）バス停の頭上　6月初旬

ハシボソカラス
さくらの杜公園の水飲み場　8月中旬

スズメ

都市化でその数が減っているんだって！！

古来、スズメは人の住む近くで人の生活を利用して繁栄してきました。近年では餌（えさ）を食べる草地や空き地が宅地開発され、スズメを取り巻く環境は激変し、その数は減ってきています。しかも、スズメは1回あたり4～7個の卵を年3回位産みますが、寿命は意外に短く、2～3年といわれています。「チュン・チュン」と鳴くスズメもカラスと同じく、童謡・童話や詩・俳句の題材になり、たいへん親しまれている鳥です。

スズメは草の種子や昆虫を食べ、普段は市街地・公園や河原で小さい群で生活しますが、繁殖期には、数百～数千の大群

鳥識②　漂鳥（ひょうちょう）：
日本国内で季節により移動する鳥。夏に山や北方で繁殖し、秋冬に平地や南方に移動し越冬する。

になり竹藪や葦原を寝ぐらに騒がしく鳴きあい暮らします。時には、その年生まれの若い鳥は100km以上の長距離を移動（漂鳥②）することが確認されています（ただし、小笠原諸島にはスズメは生息してないようです）。

スズメ〈大きさ 14cm　留鳥〉
さくらの杜公園　2月

スズメは人とともに暮してきた身近な鳥だが、稲作農家の人たちには、益鳥か害鳥か？　生育途中のイネの田んぼで雑草の種子や昆虫を食べるが、実った穂や干しているイネの実も食べる・・・

頬の黒の班は年とともに大きくなる。この班がないスズメをニュウナイスズメという（ニュウは黒子（ほくろ）のこと）。

サクラの花びらをついばむ
さくらの杜公園　4月中旬

すっかり若葉にかわった木に止まる
さくらの杜公園　5月

子育て中　第 2 調整池　5月

カワセミと戯れる　第 2 調整池　7月中旬

水浴び　第２調整池の野原　8月初旬

空秋に群れ始める　第２調整池　9月頃

熟した柿をついばむ　11月頃

雪の積もった戸頭駅付近の畑　2月

スズメは両足をそろえて飛び跳ねるように歩く「**ホッピング型**」。
カルガモは左右脚を交互に出して進む「**ウォーキング型**」。
カラスは両方できる。

ヒヨドリ

その名の由来は！どこからきたんだろう？

これまた朝からカラスやスズメより賑やかに騒がしく鳴き、どこでも身近に見られる鳥はヒヨドリの他にはいないかもしれません。甲高（かんだか）い鳴き声で「ピィー」・「ピィーヨ」と鳴くところから「ヒヨドリ」と名づけられました。羽ばたきと滑翔（かっしょう）③を繰り返し波状に飛ぶ特徴を持っています。昆虫や木の実を好んで食べる他、キャベツ・白菜や大根葉等々の野菜や、花の蜜も吸う幅広い食性です。

鳥識③　滑翔（かっしょう）：
羽ばたきを止めて、空を滑るように飛ぶこと。代表的なのがヒヨドリで、他にはセキレイ類の鳥。

ヒヨドリは全身が灰色で、ぼさぼさ頭と赤茶色の頬が特徴。庭先や公園でマンリョウやセンダンが芽を出すのは、ヒヨドリの糞によって運ばれた種子のおかげ。花粉を媒介する役割も持っている。

鳥が種子の周りの果肉に含まれる「発芽抑制物質」をきれいに消化して糞として排泄するので、ヒヨドリ・フィルターといわれる。（発芽抑制物質とは、木の実の落下する前に発芽するのを抑える物質のこと。）

ヒヨドリ　<大きさ　28cm　留鳥または漂鳥>
餌の少ない冬の時期、ベランダに
リンゴやミカンを置くと必ずやってくる

さくらの杜公園では四季折々いろいろな表情のヒヨドリが見られます。

レンギョウとともに　2月下旬

緋寒桜の蜜を吸う　　3月中旬

サクラの蜜を吸う　4中旬

熟した柿を食す　11月

ミカンをついばむ　10月

黄色の実を食べる　12月

冬の陽だまりに　12月

赤色の実を食べる　1月

雪の降った翌日大根葉に群がる　１月

ツバメ

ツバメの発見日は、春のきざし！！

春を伝える使者として「春告鳥」とも呼ばれるツバメは、南方から来る夏鳥④です〈大きさ17cm〉。軒先での子育ての様子は春のおなじみの光景ですね。人の住む環境の近く、特に駅周辺や市街地などに泥と枯草を合わせて巣を作って子育て生活をします。体全体が青色光沢の黒色で額と喉は赤、尾羽が長く2つに分かれ（燕尾（えんび）といわれる）、小さい白い斑があります。

鳥識④　夏鳥：
春から夏にかけて繁殖のために南方から来て、秋には南方へ帰る鳥。それに対して冬鳥とは、秋に北方から来て越冬し繁殖のために北方に帰る鳥。

ツバメの子育てスナップ（4月頃～6月頃）

求愛　戸頭駅付近の家庭菜園畑

巣作りの材料集め　第２調整池付近の水田

抱卵　ジョイフルホンダ

給餌（きゅうじ）-1　餌を欲しがるひな　戸頭駅

関東以西で繁殖しても集団でそのまま越冬するツバメ**（越冬ツバメ）**がいる。浜名湖畔舞阪・京都府や九州各地、千葉県の東金には、異常寒波で死亡したツバメを供養したことから燕塚という地名がある。

給餌-2　巣立ち間もない電線上のひな

給餌-3　第 2 調整池

巣立ち-1　みずき野近くの農業用水堀

巣立ち-2　みずき野近くの農業用水堀

ハト

鳩時計の鳥は、ハトではなくカッコウだった！

カラスと同じようにハトも身近に見られる鳥です。ハトはヤマバトの「キジバト」とイエバトの「ドバト」の2種類に分けられます。「デデッポッポー」と鳴くのがキジバト、「ポッポー」と鳴くのはドバトです。聞き分けてみましょう。

キジバト〈大きさ　33cm　留鳥〉

キジバトは黒地に赤褐色の縁取りのウロコ状の羽、首に青灰色と黒の横班が目立つ。羽色がメスのキジに似ていることが名前の由来。

「ヤマバト」とも呼ばれ平地の山林や市街地で見られ、人をあまり恐れず、時には人家の庭先にも来る。繁殖期には激しく羽ばたきしてディスプレイ・フライト⑤する。

ドバトはユーラシア大陸のカワラバトの家禽（かきん）のハトが野生化したもので、羽色は変異でいろいろある。原種は、全体に灰色で首が光沢のある緑紫色、くちばしの根元に白いこぶがある。

「イエバト」とも呼ばれ「平和のシンボル」とされ、公園・寺社・市街地に生息する。みずき野周辺では、戸頭団地のスーパーの広場で見られる。

ドバト 〈大きさ 33cm 留鳥〉

鳥識⑤

ディスプレイ・フライト：求愛時や縄張り宣言の時に、鳴きながら大きく波形を描いて飛んだり、急降下したりする飛び方。

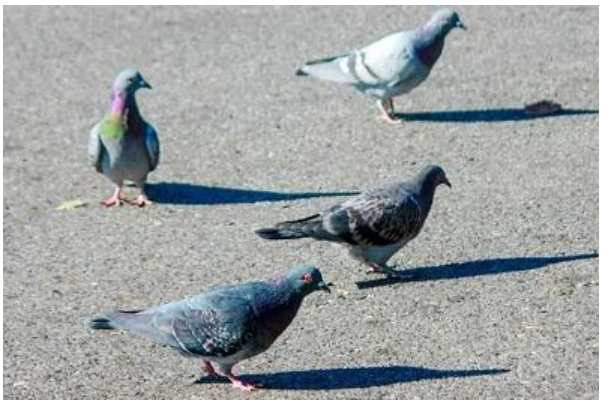
愛をささやくキジバト

水浴びするキジバト

ハトは、子育ての時期に喉もとの食物を貯める「素嚢（そのう）」が肥大し、器官の内壁の細胞が剥離し、文字どおり白いミルク状の栄養素を吐き出してひなに口移しで与える。このミルク状の液体を**ピジョンミルク**という。

白色のドバト

軒先で巣作り用の小枝をくわえるキジバト



変異でいろどりの違う羽色のドバト

V字型飛行するキジバト

※次回は、みずき野のさくらの杜公園で見た小鳥たちを中心にお届けします。